

あやかし蔵の管理人2

朝比奈 和 Nagomu Asahina



アルファポリス文庫

高校に入学したての十六歳の春。俺——小日向蒼真こひなたそうまの非日常は、父親の海外赴任ふにんにより両親が渡米し、俺一人日本に取り残されたことから始まった。

一人暮らしを許されなかった俺は、今は亡き母方の祖母の古くからの知り合いである結月清人ゆづききよとという小説家の下で、居候生活いこうをすることになった。

人見知りの激しい性格ゆえ不安でしやうがなかったが、会ってみれば結月さんとはとても優しい人だった。しかし、ホッとしたのもつかの間、俺は引越し先の屋敷で一匹の小鬼と出会うことになる。

結月邸内ていないの庭には『あやかし蔵』と呼ばれる建物があつた。その蔵の扉が人間界とあやかしの世界をつなぐ出入り口になっていて、なんと結月さんはその扉を守る管理人人だったのだ。

それをきっかけに、俺は結月さんから真実を知らされた。

俺は生来、妖怪を見ることの出来る能力と、妖怪に好かれ引き寄せる能力を持って

いたこと。俺と同じく妖怪が見えた祖母の希望で、幼少の頃にその力を封印したこと。その封印の後に、妖怪と過ごした幼少時の記憶を失くしたことを……。

再度力を封印することも考えたが、記憶に支障をきたす可能性があるため断念し、俺は結月さんの下であやかし達との付き合い方を学ぶことになった。

そうして始まった新生活は、家でも学校でも妖怪尽くしだ。

屋敷内には猫又が棲んでいるし、あやかし蔵を通って河童の兄弟や烏小天狗などの妖怪達が訪れる。さらに最近知ったばかりだが、結月さんの正体は九尾の狐という大妖怪だった。

またそんな結月さんが理事長を務めている俺の高校にも、雪女の血を引く幼馴染の兵藤紗雪や、鬼神の半妖の貴島慧がいた。全ては把握していないが、先生や生徒の中にも妖怪や半妖の人達がいるらしい。

今まで平凡に暮らし、これからもそうだろうと思っていた俺にとって、妖怪達との生活は驚きに満ちたものだった。

可愛い妖怪や気のいい妖怪も多いから楽しいし、この生活自体に不満はない。

だが、結月さんが、妖怪に好かれる俺を管理人向きだと判断しているあたりが気に

かかっている。ばあちゃんの家の古井戸もあやかしの出入り口になっていて、ばあちゃんがそこの管理人をしていたから、というのもあるかもしれない。

居候生活が無事に終わるのか、今からちよつと心配だなあ。

九重高校から結月邸への帰り道、俺はいつになく足取りが軽かった。

散々な結果に終わった中間テストに比べ、期末テストの点数が思いのほか良かったからだ。

それも、紗雪や慧のおかげだろう。覚えの悪い俺に根気強く教えてくれ、教科ごとにテスト対策も立ててくれた。自分達の勉強もあつただろうに、本当にありがたい。

ただ、その勉強会にちゃっかりと加わっていた早瀬智樹が、俺より点数が良かったのは悔しかった。

智樹は中学の頃からの俺の友人だ。妖怪とは無縁の一般人で、クラスは違うが今でも仲良くしている。大事な友達の人だが、俺のための勉強会なのに智樹に良い点を取られては、俺の立つ瀬がない。

お礼と言えば、結月さんにも言わなきゃな。テスト期間中は家事を免除してもらっ

たし、昔のことも色々話してくれた。その殆どは妖怪にまつわる話でテストに関係はなかったけれど、歴史や偉人に興味を持つものには大変役立った。

長い年月を生きてきた妖狐だけあって話題は豊富で面白かったし、結月さんが忙しくない時にまた聞いてみようかな。

そんなことを考えていると、制服の胸ポケットからこそりと小鬼の火焰が顔を出した。火焰は俺と式神の契約をした妖怪で、いつも俺を守ってくれる存在だ。

期待のこもった顔で、俺をじっと見上げている。

テスト結果がわかるまで、火焰や河童の河太達との遊びは控えていた。

「わかってるって。家に帰ったら遊んであげるからさ」

俺が苦笑して言うと、火焰は興奮が抑えきれないのかポケットの中で屈伸する。相当嬉しいらしい。

かく言う俺も、これからのことを考えると楽しみだ。何せもうすぐ夏休みが始まるレポート等の宿題はあるが、智樹の発案で、慧の家に集まって夏休み前半に片付けてしまおうという話が出ていた。

河太と池で泳ぐ約束もしているし、今年の夏はなかなか楽しそうだ。

鼻歌交じりで結月邸に入り、その足で真っ直ぐ居間へ向かう。

「ただいま帰りました」

そう声をかけて居間の障子を開けると、結月さんと猫又の朝霧がこちらに顔を向けた。

「おや、蒼真。随分ご機嫌そうだねえ」

朝霧は二本の尻尾を揺らし、結月さんは微笑む。

「お帰り。その表情からすると、結果は良かったみたいだね」

俺は向かい側に正座をして、深く頭を下げた。

「結月さんや紗雪や慧の協力のおかげで、今回は全教科平均点より上でした。ありがとうございます。テスト期間中に免除していただいた分、より一層家事を頑張ります！」

そう力強く言った時、自分の隣からふつと笑う声が聞こえた。誰もいないはずなのに……と横を見ると、着物姿の五十代の男性が胡座をかいて腕組みしている。

「え……」

だ、誰っ!? 入って来た時には、結月さんと朝霧しかいなかったよな。俺の後から

部屋に入ったとしても、隣に座られたら流石に気付くはずだ。

俺は目を瞬かせ、隣の男性をマジマジと見る。

その人は白髪交じりの無造作ヘアで、矢絣の着物を緩く着崩していた。無精髭が妙に色気のある、ダンディな人だ。彼は口角を上げ、結月さんに視線を向ける。

「健気でいい子だな、結月。今時、珍しいくらい純粋じゃないか」

「蒼真君はいい子だよ。それより、急に出てきて蒼真君を驚かさなくてくれ」

結月さんがやや呆れ気味に言い、その人はようやく固まったままの俺に気が付く。

「おや、驚かせてしまったか。いやいや、すまん。俺は陽鷲だ。よろしくな」

にっこりと微笑む陽鷲さんに、俺は慌てて頭を下げた。

「小日向蒼真って言います。俺こそ、いらっしやったことに気が付かなくて……」

結月さんは眉を下げ、俺に向かって微笑む。

「蒼真君が気付かなかったのも無理はないよ。陽鷲はぬらりひょんだからね」

「……ぬらり……ひょん？　ぬらりひょんって、あの？」

俺は目を丸くして、隣でくつろぐ陽鷲さんを見つめる。

最近、あやかし関連の書籍を読んでいるので、妖怪ぬらりひょんのことは知って

いる。

捉えどころがなく、どこからともなく家の中に入って、自分の家のようにふるまう

妖怪だとか。

なるほど。この人がぬらりひょんなら、突然現れたことにも納得出来る。出来るのだが、この見た目からはとてもそうだとは思えなかった。何せ本に書いてあったぬらりひょんは、タコのように頭の大きいおじいさんの姿だったからだ。

陽鷲さんは、どちらかと言えはお洒落なちよい悪オヤジといった風体である。俺の知っている姿とは大分違った。

本当にこの人がぬらりひょん？

「何だ。俺の見た目が、思っていたのと違って驚いたか？」

疑わしげな視線に気付いたのか、陽鷲さんは髭をなぞって言った。

「……はい。書物にあった姿と大分違ったので」

俺が正直に答えると、陽鷲さんはニヤリと笑う。

「書物に書いてあることが正しいとは限らんさ。現に一部の人間には妖怪の総大将なんぞと思われているが、実質はそんな大層なものではなくてな。あやかしどもの相談

に乗ったり、仲裁^{ちゅうさい}ばかりさせられている損な役回りだ」

肩を疎める陽鷲さんに、俺は相槌^{あいつち}を打つ。

「でも、相談されることは、頼りにされているってことですよね？」

そうであれば、やはり妖怪達にとつて陽鷲さんは凄^{あさま}しい人なのだと思う。すると陽鷲さんは少し驚いた顔をして、それから艶やかに微笑んだ。

「本当に素直でいい子だな。結月が可愛がるのもわかる」

結月さんは俺と陽鷲さんの前にお茶を置いて、静かな声で尋ねる。

「それで、今日は何の用で来たんだい？」

「ん？ 暇だったから、この子を見に来たんだよ」

陽鷲さんは軽い口調でそう言って、出されたお茶を啜^{すす}る。俺は驚いて目を瞬^{しばた}かせた。

「俺を？ 何ですか？」

「お前さんが妖怪を引き寄せる霊力^{れいりょく}持ちで、結月が目をかけている子だからさ。俺を含め、妖怪達は皆お前さんのことが気になっている」

妖怪が……俺のことを……？

「妖怪達に注目されているんですか？」

俺が自分を指さして尋ねると、陽鷲さんは愉快^{ゆかい}そうな顔で頷いた。

「そう。だから、気を付けた方がいい。俺以外にも、気になって見に来る妖怪がいるかもしれないぞ」

予言めいたその言葉に、俺の顔が強張^{こわば}る。陽鷲さんが言うと、本当に起こりそうだ。「陽鷲。蒼真君をあまり怖がらせるな」

結月さんに軽く睨^{にら}まれ、陽鷲さんはくすくすと笑って俺の頭を撫でる。

「お前さん、随分大事にされてるんだなあ。だが結月、子供ってえのはな、危険から遠ざけて大事に守るだけじゃ駄目だぜ。自衛本能^{じえいほんのう}が鈍^{にぶ}つちまう」

そう言って、陽鷲さんは少し真面目な顔で俺を見据^みえた。

「いいか。その素直さはお前さんの長所だが、妖怪の中には狡^{ずる}い奴や人間を困らせることを生きたいにしている奴もある。良い妖怪ばかりでないことを知った方が良い。また大神^{いぬがみ}みたいなのに襲^{いぬがみ}われたら嫌だろう？」

少し前、結月さんの留守中^{留守中}に邸内^{うちうち}の結界を破って犬神が入り、俺が襲^{いぬがみ}われるという事件があった。すんでのところで結月さんに助けてもらったが、間に合わなかったらきつと俺は命を落としていたに違いない。

人生で最も恐怖し、自分の無力さを感じた出来事だ。

結月さんは陽鷲さんを見つめ、声のトーンを落として言う。

「犬神が蒼真君を襲ったのは、瘴氣が原因だよ。瘴氣を取り込まなければ、凶暴化することも襲うこともなかっただろう」

瘴氣とは、妖怪の憎悪や負の感情が凝り固まった念のようなものことで、時折人間界へと噴き出す。その瘴氣を取り込むと、妖怪や人間は凶暴化してしまうのだという。

俺を襲った犬神は、生来真面目な性格だった。しかし、心の奥底にある人間への恨みを瘴氣によって増幅させられ、妖怪と人間の架け橋となり得る俺を襲って来たのだ。「だがな、数百年に一度の周期で噴き出していた瘴氣が、最近あちこちで漏れている。また同じ事態にならないという保証はない。俺はこの子に、ちゃんと自分を守る術を教えた方が良いと思うね。この小鬼程度の守護でなく」

陽鷲さんはからかうように、俺の肩に乗っていた火焰を指でつついた。つつかれた勢いで火焰が肩から転げ落ちたので、俺は咄嗟に両手で受け止める。

手の平に転がった火焰は、何が起きたのかわからず目をパチクリとさせていたが、

眉を寄せて起き上がる。そして、俺の指の間から顔だけを出し、陽鷲さんに向かって

「あっかんべー」と舌を出した。

「おや、その可愛い形で、俺に歯向かうのかい？」

楽しげな口調で言う陽鷲さんに、火焰は慌てて俺の手の内に隠れた。

カラカラと笑っている陽鷲さんを見て、結月さんは少し眉を顰める。

「陽鷲の危惧は、私も充分わかってるよ。蒼真君には、これから身を守る術を教えしていくつもりだ。ちょうど夏休みもあるしね。少しずつ修業させようと思っている」

「え……夏休みに修業？」

初めて聞いた話だったので、思わず聞き返す。

俺の楽しい夏休み計画に、修業の二文字は組み込まれていなかった。

「蒼真。遊びたい気持ちもあるけど、夏休みが終わるまでにはちゃんと自分の身くらい守れるようにおなりよ。それに、あんたが修業すれば式神である火焰も強くなる。一石二鳥ってもんさ」

朝霧にすっかり釘を刺されて、俺は肩をすぼめる。

犬神襲撃の際、朝霧は身を挺して俺を守ってくれた。その忠告はとても重い。

落胆^{らくたん}しつつ頷くと、結月さんは穏やかな口調で慰める^{なぐさ}。

「修業と言っても、蒼真君はもともと霊力があるし、そこまで大変ではないよ。日課として少しづつやればいい程度だから、そんなに心配しないで」

そんな結月さんに、陽鷲さんは腕組みしてしみじみと呟いた。

「いやあ、それにしても、あの結月が随分優しくなったなあ」

あの〴〵ってどういうことだろう。結月さんは誰に対しても温和^{おんわ}で優しいが……？
「……陽鷲、そろそろ帰ったらどうだい？」

結月さんにはっこり微笑み、廊下を指さした。

「来たばかりだろう。もう少しこの子と話をさせてくれてもいいじゃないか。なあ、蒼真も俺に聞きたい話があるだろう？」

「聞きたいことですか？ ……えっと、結月さんと知り合ってどのくらいなんですか？」

誰に対しても親切な結月さんだが、陽鷲さんへの対応は砕けたものだ。

俺の質問に、陽鷲さんは天井を見上げて少し首を捻った。

「そうだなあ。六百年か七百年か……？ まあ、付き合いが長い方かな」

六百年と七百年では百年も差があるが、長い時を生きているとそれも些末^{さまつ}なことなのだろうか。どちらにしても俺には遥^{はる}か昔のことすぎて、想像も出来ない。

「出会った時の結月は溢れる妖力を抑えもしなかったから、小者の妖怪が恐れて近寄れないほどだったな」

「え、そうなんですか？」

俺の知る限り、小鬼や河童など、結月さんを尊敬して慕っている小さな妖怪達は多い。

では、今はその強い妖力を抑えているということか。

「陽鷲、昔の話はもういいだろう」

結月さんが話を切り上げようとしたが、陽鷲さんは聞こえない素振り^{そぶり}で手を叩く。

「ああ！ そういや、昔の結月はひどく無愛想^{むあいそう}だったよなあ。俺でさえ、はじめは話しかけるのに躊躇^{ちゅうちよ}したもんだ」

当時のことを思い出したのか、陽鷲さんは可笑^{おか}しそうに肩を震わせる。それから慣れた仕事で、帯に挿^さしてあった革^{かわ}のケースから、煙管^{きせる}と刻み煙草^{たばこ}を取り出した。だが煙草を詰める前に、結月さんが低い声で言う。

「陽鷲、屋敷内は禁煙だ」

結月さんの制止に、陽鷲さんはビタリと動きを止めた。

「は？ 禁煙？ 前までそんなこと言わなかっただろう」

楽しげな顔から一転、眉を顰める陽鷲さんに、結月さんは穏やかな笑みを浮かべた。
「少し前からそうなったんだよ。蒼真君は成長期だからね。出来れば有害な煙を吸わせたくはないんだ」

「……仕返しかな？」

「まさか。ただ、ここに出入りするなら守ってもらわないとね」

口元を引きつらせる陽鷲さんに対して、結月さんは悠然と微笑んだ。まだまだ。やり取りを聞いていた朝霧は、陽鷲さんの顔を見て「くくく」と笑った。

「陽鷲の旦那、諦めなよ。この屋敷の中は、結月の結界によって支配されている。いくらアンタだつて、敵いっこないよ」

陽鷲さんは舌打ちをして、煙草の入っていない煙管を咥え立ち上がった。

「今日はこの辺で帰る。だけど、また来るからな」

そして俺が瞬きをした間に、陽鷲さんの姿はなくなっていた。

「消えた」

俺が驚くと、朝霧が欠伸をして言う。

「消えたんじゃない、気配を消したのさ。気付かぬ間にいて、気付かぬ間にいなくなる。それが、ぬらりひょんなんだよ」

陽鷲さん。ひょうひょうとして捉えどころのない、不思議な妖怪だったな。

陽鷲さんの訪問から数日経った土曜日。俺は裏屋敷にいた。

結月郎は表屋敷と裏屋敷の二つに分かれていて、それを渡り廊下がつないでいる。

俺が普段生活する所は表屋敷、あやかし蔵があり妖怪達に開放しているのが裏屋敷だ。そんな裏屋敷の庭にゴザを敷き、俺はその上に胡坐をかいて瞑想していた。

強い霊力があっても、それを上手く解放出来なければ自分を守るための術も使えない。そんなわけで、まずはじめに霊力の解放を習得しようとしているのだ。

しかし、教えてくれると言っていた結月さんは、今ここにはいない。小説の締切を忘れ、担当編集者に見張られながら部屋で缶詰になっている。

終わったら来るそうなので、それまで慧や紗雪、朝霧や河太と河次郎に付き合っ

もらい、瞑想による霊力の解放を行っていた。

俺は片目を開けて、目の前にいる皆の顔を窺いつつ尋ねる。

「俺の霊力に何か異変ある？」

河次郎は困り顔で視線を落とし、慧と紗雪、朝霧と河太は大きく首を横に振った。

「いや」

「ないわね」

「ないね」

「全然ないな！」

畳み掛けるように言われ、俺は後ろに引っくり返ってゴザに寝転んだ。

胸ポケットから出て来た火焰が、心配そうに俺を見つめる。俺のため息が、火焰の髪を揺らした。

「駄目だ。結月さんは簡単だって言ってたのに、全然出来ない……」

一時間くらいずっと瞑想しているが、一向に霊力が解放される気配がない。

すると、朝霧が寝転んだ俺の額をポンポンと叩いた。

「弱音吐くんじゃないよ。まだ始めたばかりだろう。それに、結月は簡単だなんて

言ってなかったよ。それほど大変じゃないって言ったんだ」

「似たようなものじゃないの？」

猫の肉球は気持ちいいなあと思いつつ尋ねると、朝霧はやれやれと首を振る。

「全然意味が違う。蒼真には修業の第一段階が必要ないから、その分大変ではないってことを結月は言っていたんだよ」

「修業の第一段階？」

「霊力を高める修業のことよ。蒼真君のように生まれつき霊力の高い人もいるんだけど、普通の人はもともと霊力そのものが少ないから」

紗雪は零れ落ちる髪を耳にかけ、寝転んだままの俺を微笑みながら見下ろす。背景に木漏れ日を置いたその姿に見惚れていたが、紗雪の隣に慧の強面が並んで現実に引き戻された。平常時の顔でも、慧に見下ろされると妙に威圧感がある。

慧は俺の手を引いて、上半身を起き上げさせてくれた。

「霊力が少ない場合、滝行やら山籠もりやら断食などで精神と肉体を追い込み、霊力を高める修業をしなくちゃいけない。それは、相当過酷なものだ」

「つまり、俺はその修業をしないで済む分、楽だってことか」

俺が言うと、朝霧はこっくりと頷いた。

「そうさ。そう考えたら、全然大変じゃないだろう?」

第一段階の大変さを想像したら、確かに今やっている修業は何てことないだろう。

「わかった。出来るように頑張ってみる。……とは言うものの、瞑想していても何も引つかかる感覚がないんだよね。アプローチの仕方が悪いのかな?」

俺が首を傾げて聞くと、紗雪は少し困った顔をした。

「こういったのって個人差があるから、感覚を伝えるのが難しいのよね」

「それに俺達は妖怪との混血で、使うのは妖力だしな。そのせいか生まれてすぐ力を解放することが出来たから、正直一番はじめのきつかけを覚えてないんだ」

慧が小さく肩を竦めると、すかさず河太がクワツと手を挙げた。

「オイラは解放の仕方はわからねえけど、妖力を練る練習ならしたことあるぜ。丹田に意識を集中させて、体に行き渡らせるようにすんだ」

「あんちゃんに教わって、オイラも出来るようになりました」

河太と河次郎がお腹の下辺りを撫でてポンと叩くと、朝霧は二本の尻尾を振った。

「ああ、そりゃあいい方法かもね。霊力の流れを意識出来ないから、上手くいっ

ていないのかもしれない」

丹田……。東洋医師の番組が何かで、気力の集まりやすいところって説明していたのを聞いたことがあるな。確か、へその下辺りだったっけ。

俺は下腹部に手を当てて、そこで呼吸する意識を持ちながら目を瞑った。

はじめは木々のざわめきや風の音が気になったが、呼吸を繰り返していると段々と頭の中が静かになっていく。

何だか、お腹の辺りが、少し温かくなってきた……。

それがさらに強くなるくらいになったところで、血管の枝分かれをイメージしながら意識を広げていく。広がったところも、不思議と温かさを感じた。

ただ、手足の末端までは意識が広げられず、ムキになり始めたせいで雑念が入ったのか、広がっていた感覚は霧散してしまう。

「あー、失敗した」

ゆっくり目を開けて、落胆して呟く。毛繕いをしていた朝霧はそんな俺に近付き、満足そうな顔で前に座った。

「いや、初日としては上出来だ。瞑想している間、霊力が高まるのを感じたからね。

方法としてはあれでいいだろう。回数を重ねれば、そのうち霊力も解放されるさ。霊力解放は終いに^{しま}して、ちょっと休みな」

「え、お終いでいいの？」

朝霧の歩いて行く方向を見ると、縁側で慧や紗雪達がお茶を飲んでくつろいでいた。いつ来たのか結月さんもいる。

結月さんは綺麗な所作^{きらいしよさ}でお茶を飲みながら、俺に顔を向けて微笑む。

「蒼真君、お疲れ様」

「終わったのか？　じゃあ、蒼真も団子^{だんじ}食えよ。紗雪の持ってきた団子、美味いぞ！」
食べかけの草団子の串を振って、河太が俺を呼んだ。

結月さんがいることもそうだが、お茶の用意をしていることにも気が付かなかったな。瞑想で集中していたせいかな？

俺は首を傾げ、立ち上がりうとしてつんのめった。胡坐をかいていた足が、何故か痺^{しび}れて感覚がない。足ばかりか、体全体がギシギシしているような気がする。

「え？　あれ？」

俺が上手く立ち上がれずにもたついていっていると、縁側にいた紗雪と慧が駆け寄り、両

脇から俺を支えてくれた。

「大丈夫？」

「長時間動いてなかったんだから、急に動かすな」

「ありがとう……って、え？　長時間？」

目を見開いた俺に、朝霧が前足で顔を擦^{こす}りながら笑う。

「アンタが丹田を意識するように瞑想し始めてから、もう二時間は経っているよ」

俺にとっては十数分ほどの感覚だったから、にわかには信じられない。しかし、言われてみれば、高い位置に太陽があった。

「本当だ」

愕然^{がくぜん}とする俺に、結月さんはにこやかに言う。

「それだけ集中していたということだよ。初めてでこれだけ出来るなんて驚いた。やはり葵^{あおい}さんの血を引いているだけあって、素質があるのかな」

「本当ですか？」

葵は祖母の名前だ。霊力が強く陰陽術にも長けていたのだと聞く。

褒められて浮かれる俺に、縁側の座布団に座った朝霧がそっけなく言う。

「ま、息を吸うくらいの間で霊力解放出来ない、使い物にはならないけどね」

相変わらず厳しい。だが、朝霧の言葉は正しかった。襲われた時に、霊力解放するだけで二時間もかかっていては話にならない。

「まだ初日だから気にすることは無い」

「そうよ。とにかく、休憩しましょう」

慧と紗雪は優しい言葉で慰め、手を引いて縁側に連れて行ってくれる。

縁側に座って、手を握っては開くのを繰り返して、じんわりと戻ってきた指先の感覚に安堵する。そんな俺に、河太が草団子を差し出した。

「ほら蒼真、草団子食べろ」

「美味しいですよ」

口に餡子を付けた河次郎が微笑む。元気づけてくれているのがわかり、俺はお礼を言って差し出された草団子を受け取った。餡の載った草団子を食べると、程よい甘さが口に広がり、ヨモギの爽やかな香りが鼻に抜ける。

「美味いだろ？」

自分が作ったわけでもないのに、河太は何故か誇らしげだ。俺はそれに笑顔で頷き、

それからお茶を飲んでいる結月さんに顔を向けた。

「結月さんがここにいらっしやるってことは、お仕事は終わったんですね。文乃さんはもう帰られたんですか？」

文乃さんは文車妖妃という妖怪で、結月さんの本の編集担当である。結月さんがよく締切を忘れる上に、メールや電話では連絡が取れないため、直接家まで見張りに来るのだ。

「文乃ちゃんは会社に戻ったよ。前は締切日をずらしてくれたのに、最近は全然許してくれないんだよね」

結月さんは悲しそうな顔で言うけれど、何度も締切を破られれば仕方がないと思う。彼女の苦勞を知っている俺は、悪びれた色もない結月さんの姿を見て、また同じ目に遭うであろう文乃さんに同情した。

昼休憩を挟んで、次は結月さんに護符作りについて教えてもらうことになった。護符とは呪符の一種で、災厄から身を守り、幸福を招くお守りだ。木や紙にまじないを書いて作る。

護符作りに必要なものがあると言うので、結月さんに連れられ裏屋敷の庭の奥にある竹林に向かう。ふかふかとした土の道を、結月さんについて奥へ奥へと歩く。

「こんな奥までは来たことがなかったな」

慧の言葉に紗雪が頷き、河次郎がキョロキョロと辺りを見回す。

「オイラも来たの初めてです」

そう言って、つないでいる俺の手をぎゅっと両手で握った。河太は俺のもう片方の手を握り、先頭を歩く結月さんの背に声をかける。

「結月様、こちらには何があるんですか？」

「河太達にはもうわかるんじゃないかな」

結月さんの言葉に河太達は再度辺りの様子を窺い、ハッと何かに気が付いた。

「こっちから綺麗な水の匂いがある！」

嬉しそうな河太達に手を引かれて行くと、丸く石組みされた水辺が見えてきた。

水底には白い玉砂利が敷かれ、水が湧いているのか水面の中心が浮き上がっている。石組みから溢れ出た水は、地面に埋められた樋を伝ってどこかに流れているようだ。

「これは湧水だよ。山から下りてきた清い水が、湧いて出ているんだ。ひょうたん池

に流れている」

そう言えば、結月邸の庭にあるひょうたん池は湧水なのだと聞いたことがある。

結月さんは懐から細い竹の水筒を取り出し、石組みの脇に置いてあった柄杓で水をすくって注ぐ。紗雪はその様子を見て、結月さんに尋ねた。

「その水を、護符を作るのに使いますか？」

「そう。護符を書く墨をするのに使いますよ」

「水道水じゃ駄目なんですか？」

俺が驚くと、朝霧は呆れた顔で俺を見上げた。

「駄目に決まってるだろう。清い水っていうのはね、それだけで邪気を払う力があるんだ。さらに、結月邸の結界内にある湧水だから、浄化の力も強いしね」

なるほど。清い水で墨をすれば、護符の力も強くなるわけか。

「護符というのは、ただの呪文を書いた紙と違うんだ。そこにあるだけで力がなくてはならない。それゆえに、色々と約束事があるんだよ」

そう言いながら、結月さんは水筒に栓をした。俺は手を出してそれを受け取る。

屋敷に戻る途中、結月さんは護符作りに必要なことを説明してくれた。

「今回は練習だから簡略化するけど、本来は護符を作るのに最適な日時がある。日は陰陽道に基^{もと}づいた大吉日や吉日、時間は午前二時から三時半に作った方が良いとされている。護符を作る前は水で身を清め、墨の水は新しく汲^くんだ清い水、筆は細筆、紙は手すき和紙などがいい。墨も書く護符の種類によって、濃い墨か朱色の墨が分かれている」

護符の書き方を学ぶと言っても、ただ書き写しの練習をするだけかと思っていた。「結構大変なんですね」

不安になった俺に、結月さんはくすりと笑った。

「そうだね。けど、そうやって作った護符は、きつと蒼真君を守ってくれるよ」水を持って戻った俺達は、裏屋敷の部屋で護符作りの練習を始めた。

まず結月さんのお手本を見て書き写^つしてみる。しかし、書き慣れない護符の文字は、書き写すだけでも大変だった。文字が潰^{つぶ}れてしまったり、特殊な文字ゆえに間違ってしまったら、一枚作るのも一苦^く労だ。

朝霧が俺の書いた護符を覗^{のぞ}いて、ポツリと呟いた。

「……下手だね」

そこにはいつもの嫌味っぽささえない。むしろ憐^{あわ}れんでいるかのような響きがあった。

自分でもいまいちだとは思っていたが、やはり下手か。

落ち込んだ俺がふと隣を見ると、紗雪と慧が何枚目かの護符を書き終えたところだった。今日初めて書いたという二人の護符は、結月さんの書いたものと遜^{そん}色^{しよく}ない出来栄^えだ。彼らがハイスベックなのか、それとも俺が何も出来ないだけなのか……。 「ごめんね。代わりに書いてあげたいんだけど、護符は自分で書いた方が効力があるものだから……」

「蒼真が書けるようにならないといけないからな。俺は心を鬼にする」

紗雪は申し訳なさそうな顔で言い、慧は苦悩の表情を浮かべる。大げさな二人に、俺は苦笑した。

「わかってるよ。代わりに書いてもらおうなんて思っていないって」

そんな俺達のやり取りに、結月さんは目を細める。

「大丈夫。練習していれば、そのうち上達するものだよ」

「はい。頑張ります」

とにかく練習あるのみだ。まずは『護符を間違わずに十枚書く』という低い目標を掲げて練習する。その十枚に到達した頃、一息ついた俺の耳に鼻歌が聞こえてきた。見れば、河太と河次郎が筆で記号を書いている。

火焰が手を通り黒にして紙に黒いもみじを作って遊んでいたの、河太達もいたずら書きをしているのだと思ったが、どこか規則性があるようにも見える。

「河太と河次郎、何を書いているの?」

「河童文字です」

「河童文字?」

河次郎の返答に俺が小首を傾げると、河太は得意そうに教えてくれる。

「オイラ達河童特有の文字さ。水に浸すと、他の妖怪や人間でも読めるようになるんだ」

そう言うって河太は頭の皿でピシャピシャと手を濡らし、自分が書いた紙にその手を置いた。紙が濡れた途端、書かれた記号が滲んで文字へと変わる。

そこには「そうま ゆうはん なに?」と書いてあった。

「へえ、秘密の暗号みたいだね。それにしても、この内容……」

噴き出した俺に河太はすり寄り、ねだるように言った。

「今日の夕飯は何だ? オイラ達も食べていいだろう?」

俺は頷いて、それから腕時計を確認した。

「そろそろ、夕飯の下準備をしなくちゃいけない時間かな」

「じゃあ、今日の修業はここまでにしようか」

結月さんの言葉に続き、慧と紗雪が道具を片付けながら言う。

「蒼真、ここは俺達が片付けとくから」

「片付け終わったら、手伝いに行くわ」

「ありがとう。……火焰もおいで。墨で真っ黒だから洗おう」

火焰と共に裏屋敷を後にした俺は、まず洗面所へ行き火焰を洗うことにした。

虎柄の腰巻にも墨がついていたはずだが、鬼の腰巻は特殊らしく汚れてもすぐに綺麗になるようだ。体は真っ黒なのに、腰巻だけは綺麗だった。

洗面台にぬるま湯を張って墨を落とす。ほかほかピカピカの火焰を肩に乗せて、キッチンへ向かった。

今日の夕飯は慧達や河太達もいるから、皆で食べられる献立にしなきゃな。

立ち読みサンプル はここまで